博士論文審査及び最終試験の結果

本論文は題目を「モンゴル馬の毛色の研究」—モンゴル馬事文化研究序説—としてモンゴル馬事文化の中に占める毛色（ズスム…jisüm）という語の概念についての研究である。

周知の如く、モンゴル民族は遊牧騎馬民族であった。その彼らが発展させてきた馬事文化の中でモンゴル人自身をも含めて最も理解しがたい概念の一つがズスムである。従って、モンゴル人自身による多くの先行研究に於いてもこのズスムとウンゲ（öngge）とが常に混同されていたのである。しかるに、剛布和氏はこの似て非なるウンゲとズスムとを明確に区別しその概念を規定したのである。このズスムというモンゴル語を毛色（けいろ）と訳したのは他によい訳語が見つからないためであるが、氏が英文要旨に用いた如く appearance（容貌）という語と極めて近い概念である。

モンゴル馬事文化研究史上、このウンゲとズスムとを最初に明確に概念規定したのは剛布和氏であり、これは非常に大きな功績である。次に本論文の要旨をかいつまんで示しておく。

本論文は第一部と第二部よりなり、第一部では序章に於いてモンゴル馬事文化について略述し、次いで第１章に於いて日本、中国内モンゴル自治区、モンゴル国に於ける研究概況を示した。第二部第１章では騎乗用及び飲食用としての馬について述べ、馬具、馬乳酒などについて概説した。第二部第３章では、モンゴル人の馬に対する認識の仕方について取り上げ、焼印と乗用馬の諸特徴（シンジ…sinji）とについて概説した。ここまでは次に述べる本論文のメインテーマである毛色の研究を理解するための基本的知識の確認として述べられたものである。次に第４章の毛色の研究についてであるが、上述の如くモンゴル人自身も外国人研究者も全てウンゲとズスムとを混同していた、つまり、各々の語の持つ概念が明確に規定されていなかったことを批判的に取り上げ、特にズスムとは何かについて論究し、その概念を明確に規定したのである。では、ウンゲとズスムとはどのように異なるのであろうか。

ウンゲとは家畜の色を表現するだけでなく、その他の森羅万象の色の表現にも用いられる。また、モンゴルではこのウンゲを用いて、年月日、時刻、方向、季節なども表現するようになったが、これは漢文化よりの影響である。次にズスムとは、時に、黒、白、黄色、青など、色を表現する語がそのまま用いられる例もあるが、ほとんどの場合、馬についてのみ色プラスαという形式で用いられる表現である。ここで言うαとは、例えば、馬の額にある星、四足の先端の色、旋毛があるか否か、どのような耳の形状をしているかなどのことであり、これを総合して理解すれば、英語の appearance（容貌）という意味に近い。そして、このズスムの体系は、チャイワル（白

っぽい）ズスムとバラーン（黒っぽい）ズスムとに大別される。また、従来便宜的に単一のズスムと二重のズスムとに言い分けられていたが、剛布和氏によれば、ここで言う二重ズスムとは「色を表現する修飾語＋ズスム」なのである。従って、二重ズスムとはあり得ないものである、と論じた。そして、これも従来のように、ウンゲとズスムとを混同したために生じた過ちであるとしたのである。

このような論究のプロセスを経て、剛布和氏は、ウンゲとズスムとを峻別し、ウンゲとは英語の colour であり、ズスムとは appearance（容貌）だとしてその概念を明確に規定したのである。

続く第５章では、古典に表れる馬のズスム及びモンゴル英雄叙事詩に於けるそれらについて考察し、従来のモンゴル古典の世界的研究者のズスムに関する訳注に批判を加え、自説を開陳したものである。

これに対して、審査員諸氏からの多くのコメントや意見、質問がなされた。また、剛布和氏の論文の形式上の不備などについてのさまざまな注意や、助言が与えられたが、剛布和氏が外国人のことでもあり、また本論文の趣旨に瑕瑾となるようなものではないので、それも氏の将来のより精緻な研究への激励と要望と考えることができよう。そして審査員一同全員一致で剛布和氏の本論文を評価し、博士（学術）の学位を授与するに値するものと判断した。